いま夫婦をやっている人。
これからやろうとしている人。
これを観ないと「おしまい」がくる。
おしまいの日。
裕木奈江　高橋和也　菜木のり子　金山一彦　岩松了　中村扇雀　山村美智子　ミッキー・カーチス　馬渕晴子　鈴木清順　監督・脚本　君塚匠　原作　新井素子「おしまいの日」新潮社
エグゼクティブ・プロデューサー:本多良行　企画プロデューサー:畠中基博　プロデューサー:宮川健治・八木桂子　音楽:佐藤正治　撮影:前田米造　照明:加藤松作　美術:斎藤岩男　録音:岩倉雅之　編集:太田義則　装飾:嵩村裕司　スタイリスト:
勝俣淳子・三上しろえ　ヘアメイク:久道由紀　スクリプター:吉田久美子　助監督:芝祐二　制作担当:佐々木雅人　宣伝プロデューサー:宝田晴夫　製作統括:畠中節代　企画・制作:PUG POINT　製作:アーバン株式会社　配給:ビターズエンド
1999年モントリオール世界映画祭正式出品　2000年パームスプリングス国際映画祭正式出品

夫婦というカタチは、もう20世紀でおしまいかもしれない。

なぜ夫婦というカタチがあるのだろう。なぜ夫婦というカタチにこだわるのだろう。この映画は、ある2組の夫婦の物語。せつないまでに夫を想い愛しぬく妻・三津子（裕木奈江）と、そんな妻を守るため、仕事に我を忘れるビジネス戦士の夫・忠春（高橋和也）。そして、倦怠期に悩むもう1組の夫婦（菜木のり子、金山一彦）。スリリングにきしみ、揺れる2組の愛の行方は…。原作は、新井素子。監督は、「喪の仕事」「ルビーフルーツ」などで熱い注目を浴びる君塚匠。夫婦とは、ニッポンとは、ミレニアムに私たち自身を問う問題作である。

STORY

大学時代に知り合い、結婚をした三津子（裕木奈江）と忠春（高橋和也）。甘い生活も束の間、いつしか忠春は昼夜を問わず、二人の未来のため、三津子のためと仕事に打ち込みだす。三津子はそんな忠春のために一生懸命、家事をこなし、帰りの遅い忠春を何時になろうと夕食も食べずに待っていた。寂しい想いを日記につづりながら。夫・俊彦（金山一彦）との気ままな生活をしている久美（菜木のり子）。高校の時の友人でもある三津子と久美は12年ぶりに再会した。会う機会を重ねるごとに、久美は、献身的態度の三津子と仕事熱心な忠春とを見て、自分達とは対照的な夫婦関係を一方では羨望し、また一方では不安にも思うのだった。三津子は、忠春の過剰労働ともいえる毎日を心配し、いたわろうとする。しかし、そんな三津子に忠春は苦痛を感じ始め、次第に三津子に冷たく当るようになり、時には口論にもなった。それでも三津子は、忠春の体を心配し、段々とノイローゼのようになっていった。忠春と久美がその変化に気付き始めた頃、三津子が妊娠していることがわかった。忠春は子供ができたことを喜んだ。が、三津子は喜ぶそぶりを見せないばかりか、精神だけが病んでいくようだった。ある日三津子がいなくなった。日記に「おしまいの日が来た」と書き残して。

（1999年／日本／カラー／ビスタサイズ／モノラル／119分）

「おしまいの日」を見て　山田洋次さん／映画監督

君塚君が不思議な味わいの映画をつくった。もっとも彼は常に不思議な作品をつくる人だが。一種独特の透明感は監督の美意識から来るものだろうが、今回の作品はそれが一層鮮明となった。彼自身の身軽なパーソナリティと映画の味とはうんとかけ離れていて、そのことがひどく面白い。テーマがやや観念的すぎる嫌いはあるが、抽象的な画面がきわどく釣り合いをとっているあたり、なかなかの演出力であり、またカメラマンの腕前とも思われる。この作品を実現するまでの君塚君はじめスタッフの努力を思うと頭が下がる。ご苦労様と言いたい。

新井素子さん／作家（原作者）

小説と映画はまったく別のものだ。それ、頭では判っていた筈なんだけど、今回「おしまいの日」の映画をみて、より実感した。実は。シナリオを読ませていただいた時、あれ？って思ったことがあったのだ。原作の一部が割愛され、原作にないシーンがあるのは当然のことだが、増えたシーンの意味が、私にはよく判らなかったのだ。お話の構造からするといらない感じがして。それが完成作品を見てびっくり。それらのシーンが、ことごとく、非常に印象的で感動的な場面に変身している。成程、文章における盛り上げ方と映像的な盛り上げ方はまったく違うんだ。下手に原作にこだわらないでくれて、本当によかった。小説「おしまいの日」は、私の可愛い子供である。私は、わが子に、「いい監督、いいスタッフ、いい出演者に恵まれてよかったねー」って心から言えて、とても幸せな原作者である。

1月15日（土）よりレイトショー！

連日P.M.9：00より1回上映
特別鑑賞券¥1,500絶賛発売中！（当日一般¥1,800のところ）
当日料金　一般¥1,800／学生¥1,500／シニア・小人¥1,000

新宿武蔵野館
シネマ・カリテ
JR新宿駅東口三越ウラ　武蔵野館3F
Phone:03-3354-5670

初日、監督・出演者による舞台挨拶を予定しています。

（詳細は劇場までお問い合せください）